

総合学習（人間領域）

木戸 壽和子 田川 信子
古川 雄次 山口 久代
小笠原 佳子 笹山 明夫
浅田 幸子

1 領域の目標

全体論の総合学習でめざす子どもの姿「共に生きる社会や環境に自らはたらきかける姿」を受けて、人間領域として次の目標を設定した。

一人一人が 互いを尊重し合うことの大切さに気づき 他とかかわり合いながら
よりよく生きようとする態度を育む

人が生活する社会では、人は人とのかかわりのなかで生きている。人はそれぞれ見方や考え方や感じ方に違いがある。一方で、共通する部分もある。さまざまな人が、互いに人とかかわってよりよい人間関係、よりよい集団、よりよい社会を築き上げていくには、違いに対して排他的であってはいけない。自分が社会における大切な一人であると同様に、他者も大切な一人なのである。人と人のかかわりの中で、互いの違いや同じところを認め合いながら、みんなが生きる社会を共有していくことが求められる。そのようなかかわりを持てるようになることで、共に生きていく社会や環境に自ら働きかけ、よりよく生きる自分を創っていかうとすることにつながるのではないかと考える。

2 活動を構成するにあたって

(1) 単元設定について

人間領域では、学習の対象である「ひと・もの・こと」のうち、特に「ひと」とのかかわりを中心にした学習活動を構成していく。それに加えて、目標にある「互いを尊重し合うこと」への気づき、「他とかかわり合いながらよりよく生きようとする態度」を育むために、次のような視点をもとに、学習活動を構成していくことにした。

1つ目の視点は「命の尊重」である。

目標にある「互いを尊重し合う」というときには、その前提として自分自身を大切にできることが求められるだろう。自分の命はもちろん、生活において自分らしく生きていけるような自分の存在がなければならない。自分を大切にこそ、他者に対しても自分と同じように大切に尊重していかなければならないという考え方がかかわっていくことができるのである。このようなことから、「自分らしく生きる」ということまでを含めた「命の尊重」を大切に考えている。この命については、いつの時代においても、その尊厳にふれ大切にしていくものとして扱っていくことが必要とされている。自分らしく生きるということについては、生涯学習の面から見てもますます重要な視点となってきたといえよう。

2つ目の視点は「交流」である。

社会（地球）にはさまざまな人が暮らしている。年齢、国、立場などさまざまであれば当然見方や考え方や感じ方も違おうだろうし、違いばかりではなく共通の部分もあろう。このような人々とかかわってよりよい社会を築いていくことが、今後ますます重要になってくる。そこで、子ども達と年齢、国、立場などの違いを持った普段ふれあう機会が少ない人たちと交流し、どういう立場の人であっても互いを尊重していくことの大切さに気づいていけるような素地を作っていきたいと考えた。

3つ目の視点は「行動化」である。

1つ目、2つ目の視点をもとに学習を進めたならば、自ずと子どもから人とかかわり合いを求める行動が期待できるだろう。それは「何かしてあげる」という行動ではなく、「自分にも何かできるはずだ」という意識に立った行動である。行動化を促すために、単元の中で「自分に何

ができるか」を考える場や子どもの考えに基づく交流の場を繰り返し設定したい。子ども自身で考え行動することの積み重ねを大切にすれば、単元終了後も、例えばボランティア活動につながったり自分の身の回りの「ひと」と交流を始めたりするなど、社会や環境に自らかかわっていきこうとする行動が現れてくるだろう。

以上3つの視点に基づき、各学年の単元を構成していくことにした。これらの視点をもとに学年を追い学習を進めることによって、子どもに共生に根ざした社会づくりに対する意識化や行動化を期待することができるであろう。

(2) 学びを深めるために

全体論の「単元を構想するにあたっての4つの視点」を受けて、人間領域では、それぞれを次のように考えて単元を構想するようにした。

① 一人一人のさまざまな「ひと」へのはたらきかけを促す

学習の対象が「ひと」であるだけに、いろいろな配慮が必要なことは言うまでもない。しかし、なるべく直接ふれ合う場を設定していきたくと考えている。相手をより意識した計画にもとづき、相手の方にとっても意義のある出会いの場となるようにしていきたい。これまでの実践では、ややもすると、子ども達の「学習のために」という意識が先行し、真の交流となっていないケースが見受けられた。互いを尊重し合った交流、子ども達の必要感から生まれてくるような働きかけに留意したい。

また、活動の中で、追求活動の個性化に対処したアドバイスや支援が行えるように、T・Tによる指導体制を構成したり、専門的な知識が豊富なゲスト・ティーチャーを招いたりして、その専門家からの知識を得て、交流の意義にふれさせていく場なども考えていきたい。

② 一人一人の「共生」にかかわる素朴な考えの表明を促す

①で述べた活動を通して、子ども達は実感をもって「ひと」とのかかわり合いをつくろうとするだろう。そして、自分なりのことばでその出会いや交流のようすを語るができるのではないだろうか。その表現のなかには、きっと「共生」にかかわる思いが含まれているはずである。その表現を促すことによって、自分が何を求めようとしているか、また問題と考えているかを自覚できるのではないかと考えている。自分の思いを書いたり、友達に話したりする場を適宜設定していきたい。

③ 一人一人の思いの共有化を図る

個々が学習を進めていくときに、一面的な追求に終始することなく、自分の認識を広げたり深めたりできるようにするために、子どもが意見交換の場を単元の途中で設定していく。先にも述べたが、この学習では特に独りよがりの追求活動となっはいけない。真の「共生」を意識する場として、また、今後の主体的な活動ができるように自分なりの思いを発表し友達の意見を聞く機会を設けたい。

なお、単元途中の意見交換の場面や成果の発表の場面では、場合に応じて教師は子ども一人一人の願いやつまずきに対する不安をしっかりと見てとり、個が全体の場に生きるような適切な支援を行えるように留意したい。

④ 子ども自身の変容の自覚を促す

①、②、③で述べてきたことをふまえ、自分なりにとらえた「命」の大切さや「共に生きる」ことの意義を記録し表現する場を大切にしたい。ここでいう子ども自身の変容の自覚とは、「命」をどう考えるか、「共に生きる」とはどういうことかについて、自分へ問いかけ自分なりに考えを出していくことである。この時、「自分はそのときにどう考えたか」「自分はどう行動したか」「命とは」「共に生きるとは」などを記述した自己評価プリント等をファイルさせ、考えや活動をふり返らせていきたい。

3 実践例 - 5年 -

(1) 単元名 お年寄りと共に

- (2) 目標
- ・生き甲斐を求めて自ら生き生きと行動しているお年寄りや、体が不自由になってしまったお年寄りとのふれ合いを通して、お年寄りへの思いやりや尊敬の気持ちを持つことができる。
 - ・お年寄りとともに生きるという視点で、自分にできることを考え、行動しようとする。

(3) 単元設定について

社会には見方や考え方や感じ方が違う様々な世代の人が暮らしている。本単元では世代の異なる者同士がふれ合い、互いの違いや同じところを認め合いながら互いに力になれることは何かをつかんでいくことが交流の意義ととらえている。

現代は急速な少子・長寿化の進展にともない、社会福祉の大きな転換期になっていると言われている。子どもや老人、障害を持った人など様々な人たちが、共に暮らすことのできる社会を創っていくことが求められている。しかし、一方では核家族化が進み、地域社会においてもお年寄りとおふれ合う機会も少ないため、心のつながりも希薄になりがちである。本校の5年生においてはお年寄りと同居している子どもは、およそ5分の1である。

そこで、ややもすると自分を別のところにおいて「高齢化社会」について考えがちの子ども達に、老人福祉センターや特別養護老人ホームでのお年寄りとのふれ合いを通して、お年寄りの環境や内面を正面から見つめさせ、自分なりの考えをもたせたい。それが、共に生きていく社会や環境を考えることにもつながっていくと考えている。

また、さらに身近な地域での老人福祉の実態を知るために施設を訪問し、センターの人、リハビリを指導している人、ヘルパーさん、など福祉に関わる人たちの工夫や苦労を知ることによって、自分たちにできることは何なのかという自問を引き出したい。このことによって一歩進んだボランティア活動などへの意識も高まっていくものと考えられる。

単元計画 (総時数 20時間 + α)

主な活動と内容	学びを深めるために
1 現代が高齢化社会になってきている状況をつかみお年寄りに対する思いを持つ ・グラフから高齢化社会になってきている状況をつかむ ・写真を見てお年寄りに対する感想や思いを出し合う	②③
自分はお年寄りにどのように接していけばいいのか	
2 自分なりに疑問に思ったことを調べる (調べ学習) ・インターネットで ・図書室で	②
3 老人福祉センター「万寿苑」を見学しお年寄りとおふれ合う (交流体験1) ＜お年寄りの思いを教えてください＞ ・生き甲斐を求めてやってきているんだな ・仲間と一緒にいるのが楽しいんだな ・自分達もお年寄りに喜んでいただけないか考え 実行する	①②
4 見学して気づいたことをグループごとにまとめる ・お年寄りの気持ち ・老人福祉施設の工夫	②③④
5 特別養護老人ホーム「万陽苑」を見学し介護が必要なお年寄りとおふれ合う (交流体験2) ・病気や体の不自由なお年寄りのために自分達にできることがないか考え計画をたてる ・実際に見学し介護について理解を深める	①②
6 高齢化社会の問題を自分のことととらえ介護のあり方についてさらに深く調べる ・痴呆症や寝たきり老人のビデオを視聴する ＜もし自分の家族が介護が必要になったらどうするか＞	①②③④
<div style="display: flex; justify-content: space-around;"> 家族で介護 在宅ケア 老人ホームへ </div>	
・自分の考えを出し合い老人介護のあり方を調べる ・金沢市長寿福祉課の方からこれからどんなことを考えていかなければならないか伺う	
7 これまで交流してきたお年寄りを学校に招いて交流を深める (交流体験3) ・素敵なお年寄りをみんなに紹介しよう ・感謝と尊敬の気持ちを歌や演奏 作品などに表す	①②③④
8 年間を通じて身近なお年寄りとおふれ合いを続ける	①②③④

学びを深めるために

① お年寄への一人一人のはたらきかけを促す

お年寄りとの同居が少なく、お年寄りとふれ合う機会の少ない子ども達が、実際に老人福祉センター「万寿苑」でお年寄りと交流しながら、生き生きと活動するお年寄りの思いや願いにふれることを通してこれからの高齢化社会で大切にしたいものを自分なりにつかませていきたい。その際、相手の立場に立った聞き取りの仕方についても事前に考えて訪問させることによって、お年寄りにとっても意義のある出会いの場となるようにしていきたい。また、質問したいことを事前に確認し、一人一人のねらいに合わせてグループを構成することにより、積極的な働きかけを促したい。

② 一人一人の「共生」にかかわる素朴な考えの表明を促す

調べ活動を通して持った自分なりの気づきや思いを大切に、一人一人の思いや気づきに合った学習活動となるよう支援していく。直接、お年寄りと話することにより、実際のことばから「ひと」とのかかわり合いが生まれ、自分なりのことばで出会いや交流の様子を表現することができるであろう。

③ 一人一人の思いの共有化を図る

「万寿苑」でのお年寄りとの交流でのそれぞれの思いを持ち寄り、小グループの中で思いを出し合って意見を交換し合い、考えを壁新聞の形にまとめていく。また、各グループの壁新聞を見合う時間を設けることによって、一人一人の思いや気づきを全体に広めていく。

④ 子ども自身の変容の自覚を促す

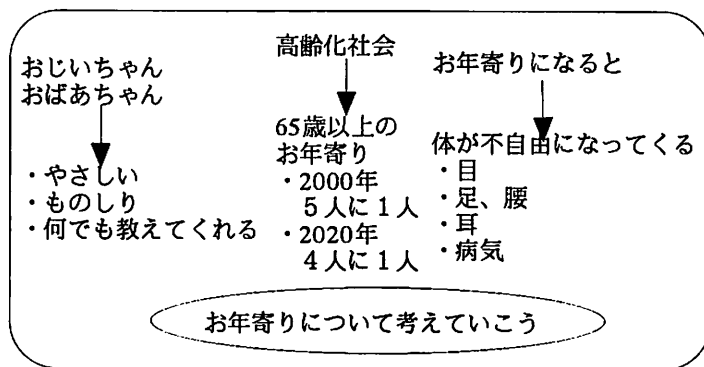
お年寄りとの出会いによって、今まで考えたことのなかった高齢化社会の問題に気づいたり、老人福祉施設で直接お年寄りの世話にあたっている人たちの気持ちにふれたり、お年寄りの心や体の健康について思いを至らせたりしたことをいろいろな角度から記録し、表現する場を設け、交流によって「共に生きる」とはどういうことなのかについて自分に問いかけ、自分なりの考えを出して、常に振り返ることができるように記録をファイルさせていく。

(4) 本單元における授業の実際と考察

本單元は、年間を通してお年寄りと交流し、お年寄りと共に生きるという視点で自分にできることを考え、行動化につなげていこうとする内容である。したがって、まだ、単元の途中であるため、ここでは交流体験1として行った金沢市老人福祉センター「万寿苑」での交流を取り上げる。高齢化のことに興味がなかったというA子、おばあちゃんと同居し、お年寄りにやさしく接しようとしているB夫、お年寄りのお世話について関心を寄せているC子の様子を追いながら考察をしていくことにする。

① 導入段階の子どもの意識

導入段階では、まず、子どもの意識を調べるためにお年寄りに対するイメージをたずねてみた。「やさしい」「ものしり」「いろんなことを教えてくれる」「何でも買ってくれる」などよいイメージばかりであった。ただ、お年寄りと同居している子どもは少なく、全体のおよそ5分の1であった。次にグラフを見て日本の高齢化が急激に進んでいることをはっきりさせた。近い将来4人に1人が



「お年寄りについて」板書

お年寄りの時代が来ると知って子ども達は驚いたようだった。また、様々なお年寄りの姿（ゲートボールを楽しむ人、仕事に励む人、介護を受ける人など）をOHPで見ても感想を出し合った。介護を必要とするお年寄りの姿を見たときには、みんな黙り込んでしまった。気持ちを和らげるために、教師の家族の例も紹介しながら決してめずらしいことではないということを伝えた。そしてお年寄りや高齢化社会について自分なりに考える時間を設けることにした。

この時点でA子は、お年寄りのことについて知りたいという意欲を持ち始めている。おじい

私は今まで『介護』『高齢化社会』ほどという言葉に全く興味が無かったです。でも先生のお話を聞くと、「こんなこともあんなことも知りたいな!!」と思いました。色々な写真を見せてもらうと、今は元気にゲートボールをしている人とか元気なおじいちゃん、お婆ちゃんがたくさんいるんだなあ〜。と思います。

A子の意識

・いよいよ遊み始め、話しあいてな、てわかる。
 ・バスとかでせきをゆるめる。
 ・いよいよ害がある人が来たら車いすを介しておかげを。

B夫の意識

きっと、足や手がふじゅうな人は、今、たくさんいると思います。
 私達がお年よりにならば、今よりも足や手がふじゅうな人がふえると思います。
 そうしたら、お世話もきっとできなくなると思うので、今の日本じゃダメだと思います。

C子の意識

ちゃん、おばあちゃんとは同居しておらず、これまではお年寄りと接する機会があまりなかったせいではないだろうか。B夫は、お年寄りのために何かをしてあげたいという気持ちがとても強いようだ。C子は、介護という視点から高齢化について問題意識を持ち始めているようだ。

多くの子ども達は、「自分にできることは何か」を考えながらも、実際にお年寄りと話をしていろいろ聞いてみたいという思いを抱くようになってきた。そこで、本校の近くにある金沢市老人福祉センター「万寿苑」を訪問することになった。学習活動は、1 お年寄りとの交流、2 職員の方への質問、3 施設・設備の見学とし、主にグループで行動するようにした。子ども達の一方的な学習にならないよう、またお年寄りにとっても来てくれて楽しかったと思ってもらえるようにするために、子ども達の合唱を入れたり、お年寄りと話すときは、自分のことも伝えたりしながら一緒に楽しく過ごせる

よう計画を立てさせた。なお、C子は、交流会の司会を進んで引き受けるほど意欲的であった。

② 「万寿苑」での交流の様子

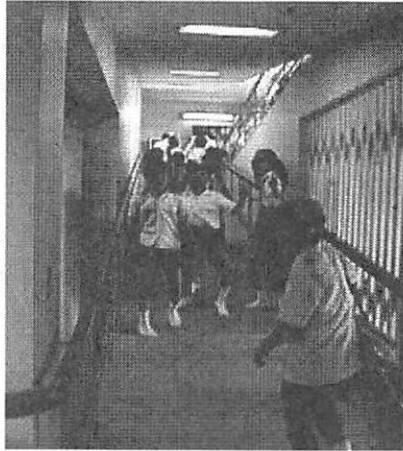
初めに今月の歌を全員で合唱し、児童代表が職員の方にまとめて質問をして答えていただいた。事前に、自分で調べれば分かることと質問しなければ分からないことを区別して質問することの必要性について考えさせておいた。子ども達はメモを取りながら職員の方の話に耳を傾けていた。



お年寄りにインタビューしている様子

交流が始まると、子ども達は、やや緊張気味で、お年寄りに声をかけることに戸惑いを感じているようだったが、グループごとの行動を支えにして、勇気を出して話しかけるようになっていった。A子のグループでは、A子が中心になってインタビューをしていた。相手のお年寄りは、少し耳が遠いようで、A子に何度も聞き返していた。そのたびに声を大きくしながら懸命に

言いたいことを伝えようとしてがんばっているA子の姿が印象的であった。導入段階で、「お年寄りになると耳が聞こえにくくなったり、足腰が弱くなったり、目も見えにくく



ゆるやかなスロープ



民舞講座の見学

なってくる」という意見が出ていたのを覚えていたのかもしれない。B夫は、なかなか緊張が解けないようだったが、それでもときどきうなずいたり、微笑んだりしながらお年寄りの話を真剣に聴いていた。C子のグループは施設見学の際、民舞講座のお年寄りと一緒に躍りを楽しんでいた。あるおばあちゃんに声をかけてもらったのがうれしくて参加したそうである。そのことを他の友達や先生に目を輝かせながら話していた。その他に娯楽室では、囲碁や将棋を楽しんでいるお年寄りのそばで熱心に観戦をしている子ども達もいた。どのお年寄りも子ども達にやさしく声をかけて下さり、子ども達は楽しく交流できた喜びや満足感を感じているようだった。後で教師がお礼に伺ったところ、自分たちも楽しかったと喜んで下さった。交流を終えた感想を3人は下のように述べている。

A子にとってこの交流はお年寄りとの貴重な出会いだったようだ。お年寄りと仲良くなりたい、もっと交流を深めたいと願うようになっていっている。自分から積極的に話しかけていったことによって世代の異なる人との「共生」の意識を持ち始めている。一方、お年寄りに何かをしてあげなければ、という使命感を持っていたB夫にとっては、お年寄りの生き生きと活動する姿は、自分の予想とは違って意外だったようである。C子の方は、お年寄りが自分の生活を楽しんでいることに気づき、お世話を必要としないお年寄りも多く、共に楽しめる存在として意識することができたのではないだろうか。

最初は、お年寄りの人と仲良くなれるか、とても心配だったけれど、お婆ちゃんもいろいろな事をたくさんしゃべってくれたので、うれしかったです。これからは、もっともお年寄りとの交流を深めて、仲良くなりたいです。

A子の感想

思っていたよりお年寄りの方がずっと元気で話しやすいかな。質問をたくさん聞かされて、質問されたり、いつもの生活の話とかもできよかった。お年寄りの方も楽しそうだった。

B夫の感想

思っていたよりも元気なおじいちゃんおばあちゃんばかりでした。おとりにおとっているおばあちゃんにおとりを教えてもらいました。みんなとても楽しそうでした。お弁当を持ち合、食べるのはとても楽しそうでした。万葉の老人福祉センターは、とてもいい所だと思いました。

お年寄りとして

C子の感想

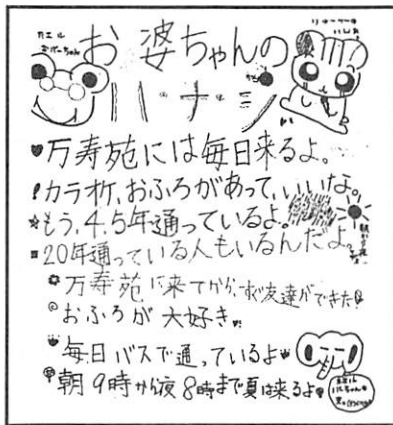
③ 一人一人の思いの共有化を図る新聞作り
交流会で一人一人が調べたことや感じたことを出し合うために、グループごとに新聞作りを行った。これは、自分の思いや調べたことをいつでも振り返ることができるよう記録を残すためでもある。お年寄りにインタビューをしてわかったこと、職員の方の努力や工夫、施設・

作りを行った。これは、自分の思いや調べたことをいつでも振り返ることができるよう記録を残すためでもある。お年寄りにインタビューをしてわかったこと、職員の方の努力や工夫、施設・

設備の工夫などについて図やイラストを入れたりしながらそれぞれわかりやすくまとめていた。

その中でC子が「普通の階段ではなく、ゆるやかなスロープになっているので、お年寄りは歩きやすい」という

意見を出したところ、D子が「車椅子でも安心だ」とつけ加えるなど、相互に交流しながらまとめていく姿が見られた。B夫は心の健康のことをインタビューしてわかったことをもとにしてまと



A子の新聞



新聞を読み合う子どもの様子

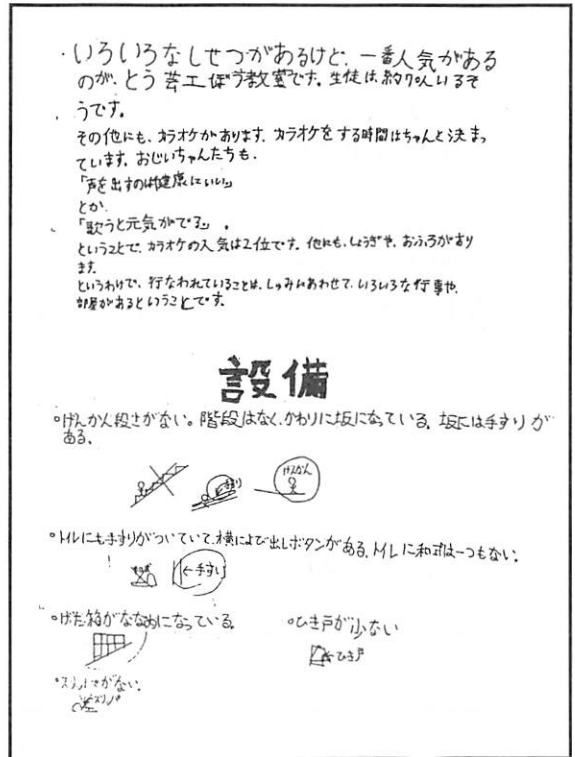
めている。特にカラオケの効果についてお年寄りから聞いた話にとっても感心したらしく、そのことを新聞にのせて

している。また、A子は、交流しておばあちゃんと話ができたととてもうれしそうにまとめている。その後、各グループの新聞を掲示してクラスごとに読み合う時間を設けた。全体の傾向として「万寿苑に行ってもよかった」「楽しかった」「また行って交流してみたい」という感想が多く、自分の思いを新聞に表現したことについてある程度の成果を挙げたと言える。しかしまだ「共生」の意識は芽生えたばかりであり、交流の継続を考慮しながら主体的な活動へと子ども達の意識を高めていきたい。

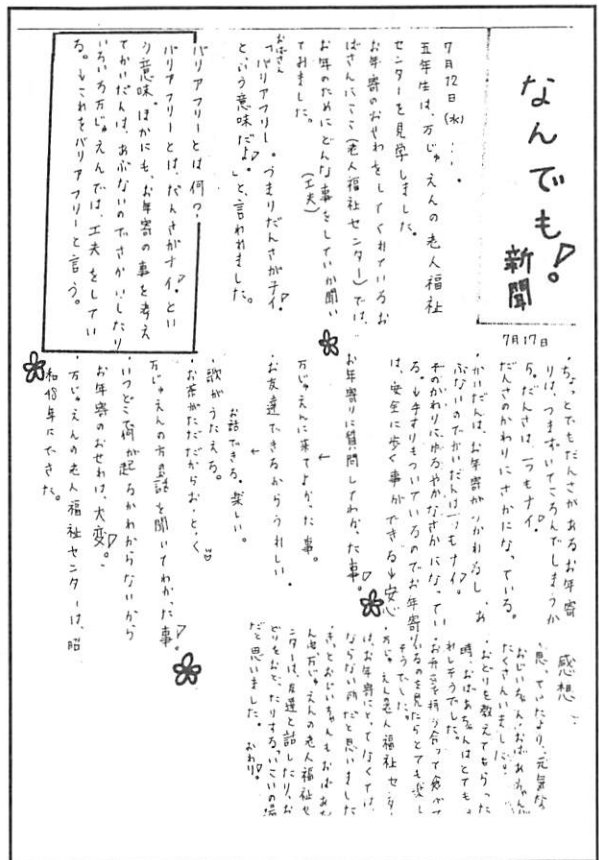
④ ここまでの実践を振り返って

老人福祉センターのお年寄りと交流すると聞いて子ども達は、B夫のように「何かお世話をしてあげなければ」という気持ちを抱いたようである。しかし実際には、お年寄りが自ら楽しみを求めて集まってきていて、とても生き生きしていることに気づいたのである。ここに子ども達の中に、自分の予想とは違っていたという意識の変化が表れたと言える。

A子は、高齢化のことについて興味がなかったという当初の素直な気持ちから、お年寄りについていろいろ調べてみたいという意欲を持ち、交流することによって進んでお年寄りに働きかけるようになった。そして「さらに交流を深めた



B夫のグループの新聞



C子の新聞

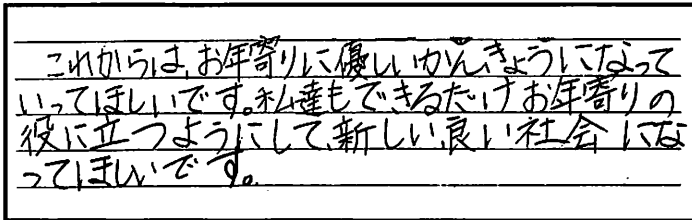
い」という願いを持つようになったのである。

B夫は何かお世話をしなければいけないという意識から、実際にお年寄りと話ることによって普段通りに話せる自分に自信を持つとともに、万寿苑がお年寄りにとって心の健康の支えになっているということに気づくようになったのである。

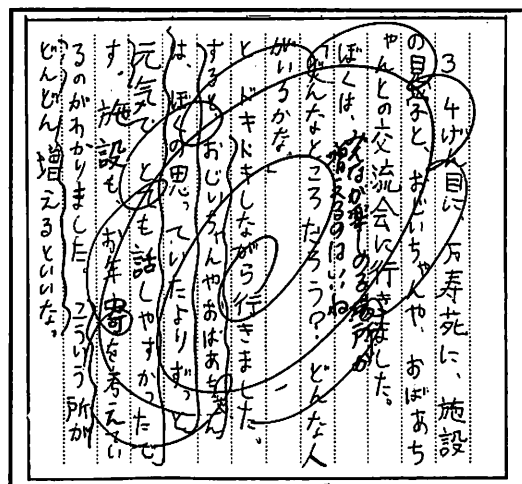
C子は、初めのうちは高齢化社会を迎え、また今後さらにお年寄りが増えていくことに少し不安を感じながらも自分に何ができるのかをまじめに考え、介護に必要な道具などについて一人調べを進んで行うようになっていった。万寿苑の施設を見学することによっていっそう「バリアフリー」や施設の重要性に関心を寄せるようになってきている。

バリアフリーや介護設備などについて学習を深めるために、交流体験2として特別養護老人ホームを訪問することを計画してる。また、寝たきりのお年寄りがいらっしゃる家庭もあり、介護が必要なお年寄りに対し関心を持って交流していくことができるだろう。

ただ、今回の学習では、子ども一人一人の感じ方のよさや思いやりの気持ち、新しい気づきなどを全体へと広げるための教師の支援が不十分ではなかったかという反省がある。そのためには、見学後あらためて子どもが交流や見学の内容を深く見つめ直せるような教師の問いかけが必要だったのではないかと思う。例えば、「万寿苑に来ると友達ができるから楽しい」ということをたくさんの子ども達が聞き取っているの



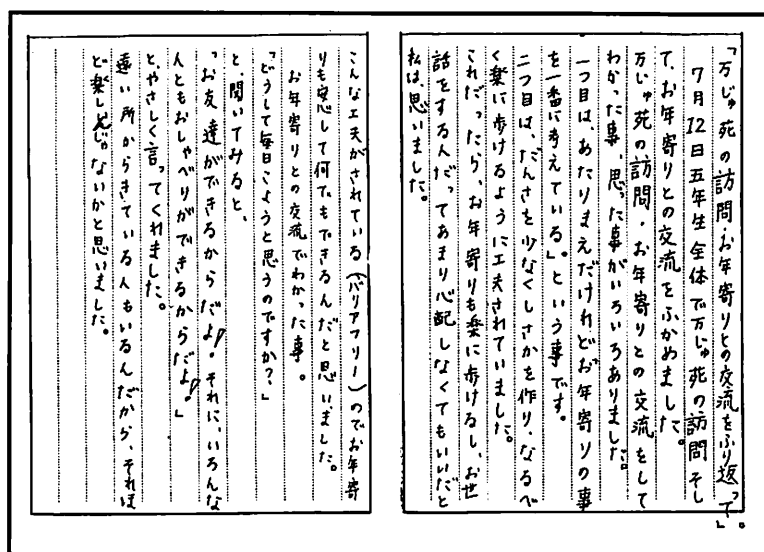
A子の感想



B夫の感想

によって、「みんなと比べてどうか」と問いかけることによって、「お年寄りも自分達と同じように、人のかかわりを求めている」ということに気づかせていけたのではないだろうか。また、ある子は一人暮らしのお年寄りもいるということを知っていたので、そのことを教師が取り上げることにより、少子化や核家族化によってお年寄りが若い世代と接することが少なくなってきて、「寂しいと感じることもよくあるのではないかと」気づかせていけたら。そうすれば高齢化社会の問題点を考えていくこともでき、「自分にできることは何か」について子ども一人一人が考えを深めていくことができるだろう。

万寿苑での交流によって子ども達のお年寄りや老人福祉センターについての意識は少しずつ変化してきた。お年寄りと共に生きようとする新しい自分を見つけていくためには、交流が大切であることを強く感じた。今はまだお年寄りのために自分に何ができかを探っている状態であり、お年寄りと親しく交わることができたという段階である。今後は介護を必要とするお年寄りとのかかわりを通して、さらに共生の意識を高めていきたいと考えている。



C子の感想